俳諧芭蕉語

坤

俳諧芭蕉語

乾坤

ことはの名をみれはかならすものゝしるしあり
徒然艸のはしにいへる事ゝ人の
世にしらぬ神おほくなりさはれともいつれ
ことの名をかへてとの嫁やまと人のあるも
これもまかれる名ゝあらはもあらてうたかふ
雅人の乃ならはしなるよしなきさとの祖

[illegible]

湖東美松山人　亜溪

故實　予幼学の時より俳諧の法を考へる故実稿と云
はんか大抵白粉奉節中も不学俳諧て其分のみ
[illegible]およそを志るしとも半篇を先師の物語
[illegible]ふ学へ行ふを記す

一卯七云先師俳諧之法を用ひ給ふ也古来日是公案なと
用ひ給ひてなりたるたるあるは古式を脱し給ふ
事もあり[illegible]と私に給ひ給ひ一先師の俳諧を
長頭丸に接の俳諧を以て[illegible]給ふ[illegible]代の俳諧秘
[illegible]給ふ[illegible]俳諧の自ハ[illegible]久しくとい[illegible]

連俳諧の発句長形式にて来法式形〳〵仮て
連歌乃式をかりて用ひ候通全て俳諧乃法式を以仕あるべ
きもなれども上より定まる法式もあるべき人作らん
事を按ずるにも異なるべし〳〵其時乃高逸遠ハ皆連歌法
なるべし連歌の法式をかり用ひらるべしあり退てあるべ
きもの也連歌の法式より俳諧乃式ハ
別ふ立一無〳〵云人を俳諧をいて連歌の奴僕乃やうにおもふ
先師の法ハ連歌なり
一ふ七日蕉門ふる不易流の解説乃事三を用ゆるべハいふふ
去来云流行ハ連歌を俳と云一句に

仰るをおもく侍ら新しんく連乃下の句にあるべしといぬ
ことを形〳〵文多留と云ハ連歌乃法也ふるハ連歌の法
よりを発句下の句にて詠も是を〳〵俳諧の句なるべ
古山乃いちこさの〳〵第ふ考り
たゝりあるべて答ひて子をも
仏をこ川考ふるを俳をあるを
かしをあ〳〵人乃乃ろうん
是〳〵連歌の発句の組乃詠句し事三もあ形〳〵
一ふ古云蕉門ふ吉事の句毎乃行ふや去来曰毎事の句ハ形と
あり毎ふ行事ふ吟と雪を先ん河曰春句も四季のあり事

恵梶名伝教名本長季九句あり名を紀名りまれと
いふ説あり四季のゝとを春と夏とつゝふ定名
あり九名を紀名もさふそ去りゝ黙止行ると也
春長季とつゝ二ッあり一ッハ春表春季とつゝ
秋ゝ長季紀即春夏

寄竹あるゝ枝つゝ竹を寄馬ゝ　蓬

何とれゝ寄れ風もありれなりあ　杉風

み詞ゝ季秋ゝとゝ二ッも一句に季と入る法ありゝ歌いハ
寄ゝも名ゝとも云ハ（なりゝ）

年ゝ中猿みゝ世ゝる猿ゝ面　蓬

かゝのゝとゝあり

一和七日数句に切字つゝとゝいふゝ玄来曰風あり先師曰汝切
字ゝ作りゝ玄来云来伊勢物語ゝ呂門ゝに字作ゝ作る
先師曰ゝふゝ玄来曰たゝを数句ハ一句本のゝとゝとゝ（なりゝ）ゝも
指根あり附句ハ切字れゝ長ふゝ数句ゝ秘ゝ先師曰
ゝ句ゝ去りれゝも夫ハ面部を去りゝ句ゝ部ゝ先を伊勢物語
切字ゝ作ゝ名連俳ゝゝふゝ秘ゝ指りゝ人に伝ゝ
と作りゝ中ゝ先師ゝ作りゝとゝ二ッも秘ゝとゝ
あ所ゝ長ゝ句ゝ秘ゝ言ゝ去りゝゝ字ゝ作る
字一ゝ切字をのるハ句を切るたゝちゝと切ゝ所句字ゝ

さりとて切字なけれハいまた句ならぬ切字も知らさる者
ありたる先達切字の数を定め其外を入る時ハ十に七
八ツハ句切るゝ故二三を入て切字ある句あり又入して
切る句あるに此底ハ哉をけやハ口あひのやうにしハ為の
しみて切字本ハ三段ハ三段切是を何切といふ一つ名目
て伝授することを聞又其事を問先師曰昔は十八字なく埋
む事あり又或人問先師曰切字に用る時ハ四十八字皆切
字なり不用時ハ一字も切字なし此八字を去て
談するハ一生秘あし人ハ語らすなり
去来曰此事を去るに同門にもしらさる者あまた

人まうし此を語り置しける穴勝先師の秘し語らぬ
事にあらすふもあらねと只先師伝授の時かくまうし
侍事もまた秘ある事を記して語りおよそお
さひ侍るなり

一　和歌花に実なきや去来云先師曰若きと語り合しか
ら句毎短句や十七句目おのゝよる発句と筆侍るとや
当流にて此秘訣を用ゆ和七日若きを引あけて侍るいふ
去来曰引あるに二つあり一ハ一座貴賤まへ人あつて
其人に花を定むる時其句宛て取り発句よき其季を定
て花を定むし是を唯字の其とて又一つを一座の其人

功若年とハ仰て ゆつるを人もあるべ物を能るを為る用
煙草を行ひ茶を飲を又あ此の時を乗に二なきの
白ぬ〳〵の物を辞退て茶ばかりをいけるとみても引あけて
作る也あ風もなく茶を呼出をいぶ出をそのし遣ひ〳〵く
茶を此器かあるを又風も形く引揚るハ〳〵ん〳〵の仕業
ちをを見るのをハ後の方を茶の式や書記録ちかを見も
角も一を〳〵人物を茶あり〳〵ル茶一白とあり
人方白ハあ〳〵を用意白を茶ふるてをを〳〵を遣
一和尚の曰積薪子茶を揚かるを風をいま古来日仏茶
茶をさらるにかつんと笑作曰風をいふ古来日仏茶を

揚かあるをとハ一流一通るいをるを茶ひるを茶方出をを
も茶やの物をよ流茶やの物をとをもを茶あり年表
年をさるをのを流をとあり流行るし笑作曰ふ
をよ古人ハ四なのを一を揚ありぬるハ風も風なを不
あ〳〵流茶を角も仕を〳〵ふと茶事のさるをを
かつを後ふるんと也年茶揚をを一をを時不少を也
仕〳〵ル仕白茶をしあるを笑ハ流ふをり
一和尚の曰蒸門茶を一白あるも揚るハるを古来日年仏茶
茶仏何ものを笑作曰ハ悪方白揚茶を勅ハ揚二白
是上茶白とあるを茶式の法や一白を〳〵揚を風ハ大切の

悪句に拙挫なからんいふことなし一説に悪き句は師和合悪句
なれバ一句にても捨置まじく次にも云ふ所皆大切におもふべし
苑也予が又一句にても捨よといふも得大切におもふゆへなり
附る志る渡し首尾一句出れバ乱れて作者悪志の付
られたるとあいさんせり又五十韻百韻といへども悪句取り除ハ
一巻といふもなきものとすかくれバ大切なる理也
又発悪句にあれバ僅二句一所に出れバ華としまへて巻
中悪句輪ハ又多くハ悪句より句またなけおそく一巻を
出来ずなれバ出座に悪句出て能よからん時ハ二句の前句を
去し付かさらん時を強て付れども一句にても捨よとの

気につかへども何とぞ巻漂ふの離く悪句も席に出よ
とのことおもふ座や執の上にかくいふもを世上道をあまりに似たれ
ともそれハ連哥なりそく俳諧の上にあら移て少なきにまる
事もあらずれども亦古人の罷人たるをあぬなれそたて
後の学ふ作しよからんことを思ひ侍るのミ
一　卯七日蕉翁に雪の字を月に用ひ侍るや去来曰然なり
洒堂深川の会に雪の字の句出たり先師曰雪の字ハ句中に月
あれバ今に月の句作るハ拙なるべしと云ふ自ら月に用ひ
まで書に月をつかまへんもいふことと月に在るの字を入るを
といへすもまつて志をし　おもふべき俳風の類なし

雪窓北白出り手曰先海院子此式を云々し上者ハ
法ふ習りんと云々式目に用ひ給る法許六カ書とつ
かえ海の雪んを自とし給ふハ風まて所るなわ
志うを伊乃原あ〳〵自に用ひ風を海ま〳〵そうし式
ゑを学て所るを許六を法川カ云侍也いと面
ゑ面あ〳〵紀原――

一聖坡曰高武カ云子答を釈義とを嵐雪云侍を弱也
先師曰答ハ釈義といとし正自神祇カ云〳〵とし予先
角をいとし退ておすあにけるるいと面風あらん一白
カ釈義をとを云とも改よ答てといとし釈義カ云んカ中えと

いふ釈カをあるをハとふ富し

蛙々私曰答を梵語也弟〳〵ハ孟業答と云刊子業
答経あり釈義ヲ和漢の節序カ高ふて釈義を
中ぬう紀しう

一去来曰許六と名月の時カ事を論ス予ハ孝一ハ月十五
夜を妻宿也法師を用る孝二和歌ハ月雪法師を
よ名ん孝三詩ハも新カ事カ事あり孝四ハ新カ事し
字義とかをとを用風志とあり冨士を不二去飛ス
答空と出ること〳〵孝五先蕉門の事カ事ま〳〵
門の答出てる〳〵かんと云許六曰時ると八月十五夜

とハ和歌の弘誓なし明らかに所詮の自力なるを名ずけ
明の名を未練といひ情は論理極まる所の自然詩を
はなれて中和の自を他をそ後歌ありしかの自に明の名を
明らかに事必ずれ

一許六曰対句に事を詠ずるあり能和
らかにして対句をもちゐるとなる
歌なるべし対句にて作あり古来日多くハ高低をしめ
和の字のもとよりの和歌人ハ句に対句も自句もむまるとも
句妻なる対句なるべし句を稚なるとも詠じ句和
句をいまと詠歌を立て句を退ておのづから句とも

ずて一体句なるを小さ言風体を能くしてハ句のとを詠
中に妻なるもかくなるべし

蝶々私曰ずるに此句乃ち名を
詠句なるべしなるあらぬ時なるべし

一去来曰句を句を言下一字いのてるはの言葉も志ある
ものし一字もたうしあ詠そんの通又作接あ句を句を
とゝのゝて天下にもる人おの堂上も作接を
人をくハ作ずるとや此より初て人乃言も言
詠ふ空うやまし地下に作接一筋あり紹巴負句も作
宗作もは作とつる和歌掌猿ゝのるるあらん

一許六曰古人の句を引て句を案じたとへば

名将の指揮の如く所向う敵

といふ類ハ名将の作ふりして自己の作よりあり

一先師曰芭蕉上俳諧の文章を作るに或ハ漢文を倣名に和ふ

事を和歌の文章に漢語を入る事ハ自あらく いやしく

云句 或ハ人情をつくしてもとり所なきを病

とする所を求る所ハ高雅うあさ所 しらべ 俗あること

歌学の文章を情に俳諧をしてみ事をたとし漢語を

かるともちらしふつゝてけりとハ歌仏の上手なる

ともいふへし

一古来日古歌を和かなを変一体すり上く作をへ

きとへば塩よりもかををくしとして西上人の歌をとれて

塩よりを海苔をそ和の歌もをて

と先師の作ありなを歌ハ同 生涯をくるもかをを歌

うしとかをいハんとの二事あり 叶ふとつをを先師ハ生涯

をくるを事をよるハ俗言をく 詩の文ハ詩をと一体すり

上ゝ作 詩ふを歌をのをちくを大概かくのをを

一先師曰凡名匠の讃をとの発句ハ其讃をを不の発句とハ

ゆる格よ作を一 西行の讃を宗祇乃画ゆを書ゆる

の句を返し歯にも用ひ侍らんハ拙きてにはなるへしとや

一 先師曰俳諧書者ハ穴勝ニ熟字ならすとも俗となるへく
詞ハ其の形の風流なるを用ゆへし 短冊なと書て按すれハ
字余りあり仮名書なれハ其まゝなるへし 草字ニかくハさなし
手本へし 先生ハ仮名ニ書とて此世情なりとしき
誹諧の名を初心風俗と云なるを紛ハしきなる名に
用申無のあるをとて先師の誹諧とも改めたまひけり

一 去来曰俳諧集の名をやかハやはり俳諧集の内にて俳付
へし 後あるハ万葉集の歌なとを見て先師も我をおもたまへん
事この内に用ゆし 集ハあつまる其の新まて為書の内に

へらそとうもおすなるへし

一 去来曰句題の寸法ありたとへハ表紙の三分の二をとり横を
五分の一をとるとやらん稽古のし時先師うけとやひ給ひ法も
おほえんそ

一 魯町曰此撰集ハ去来より季の事とも去来曰不覚撰先師
の句ふかく存て見侍る去来か季なるとも季ニなる
つきそのあるを撰ひ用ゆへし 先師季節の定とも
さらし出しえらんを後の世記よりさ撰その事と猶やさ
の類も去来の季節の志らるゝといへとも其まゝ新撰なれハ其
季ならさるにて可南の句に俳諧し侍るなるを

一卯七日先師之二月歌とつゝみ書給るよしいふ事某日志
ゝ史邦光を召て写さしめ給ふ事寸法を乗
写給ふと云脇せりなゝ事も不おもを見事為門人
写しおゝ人多し

一去某日先師日俳諧書乃名を和歌詠史録無隠笥と義
俳諧の名あゝしとあるとさふ先師の名を隠ふ歟又
ゝ歟しかるに月日記をこゝろみの書乃相
笈の小文等を読し

一去某日信化系の門和に上下をゝる後南山と号る先師
日号和歌の名不有ゝ歟信化集と唱しと

魯町ハ信化門人なゝ俳諧書ハ見
ゝるゝ俳諧とゝふゝ書あゝけし

一丈艸問長歌短歌乃ゝ海を訳あゝゝゝ義の日歌のゝ
ハ歌をとゝゝ書給を書ゝ次第を問て書ゝ
を写しとあり長歌短歌乃ゝハ海を訳もあ歟
志ゝゝを古を集て短歌の数と書て後ゝを歌ゝ
団の図録乃長歌古歌に添てゝ長歌ゝ書し
ゝ後人勢てゝ決予ハ信系書写給ゝ謬ゝ短歌
ゝゝんとおゝ短歌ハ系系系ゝ半ゝ号三十一ゝ
長歌とゝふゝ人を予おゝ上古の歌ハ号とゝふ長歌乃

体裁し称ふ三十一字の形体あり長を短歌と書て
子孫の為にのこす歟八長さを以俗歌一首或ハ二首と書
て也歟といふ説とハ云ふ三十一字のを短歌と云ハ約
言もて長歌たとへハ長歌の名目あるも歌無に長歌
と云ふ歟と云ふ説ハ長歌の名目
とあるハ三代集に採撰歌も三十一字の歌短
歌とふ書と国〻かゝる〻古の歌ハ皆長歌し後の歌
皆短歌し称ふ古詩今詩といふ如〻貴之ハ此歌の先
達しいふを短歌ハ新と書て国書にも長歌とゝふ名
るを書んや物ひなを魯魚し其誤をとゝとゝ

長を短歌三十一字を長歌と字ゝ称穿鑿用ゝ
歌加ゝ歌
一正秀問その歌人をゝりゝ古を三代集を撰歌をゝる
志ゝ撰ゝも其作る歌ハ三代集を学ふを力ふ似ぬをいゝ
なふるゝや歌云ふ以もゝゝ人ハ志ゝ人ともたゝ人の
歌ハ人ゝ歌おもゝ定家家隆を作ゝゝ歌ゝ新作ゝを
ゝ作ゝ有ゝ
一正秀問古今集ゝ文ゝ志ゝ歌ゝ歌ゝ作ゝ人ゝ志ゝ撰ぬ
歌ゝ作ゝ作ゝ人ゝ歌ゝ歌ゝ作ゝ作ゝ一集ゝ出ゝ首ゝ撰

也一系一伝若しかやうの事ありて蓮を無之ぬるを
泊と云へるりかやうに所をさとり人は場所をむすび
ふ場と云へるこれ詩歌も左様の伝あるやいなを
やまとの歌語より杜子美に云へるうちを所人の
干鎖とやらんの所よりあるうとを歌も皆伝と
云へるなり

一木節向中に古人は詩歌の蓮の云所と隠逸の云
大臣なるらん

一木節に古を集を今俗所を書所なる蓮を空虚を
此蓮のなら所おしと云所を空虚の隠制多かるんり

一古を集の序に六義を説事此説は六義を分り其義あ
たるうるを蓮を凡六義は詩の歌の和歌の義を書
うを所蓮一轍なるを知るを知をもいかうを六義 説
緯の説ふあるを家事はよりはうを事をうをを
ものたんの儒けしと古うをの説事ふ事所の事を
しに事事を儒けうをとうを変をつをうし凡六義を皆事
ありとおりうを風雅頌力内に賦比興ハうをたとをを
みるおよを六をよを今つをも引事皆事をたうを中を
凡四なをを事をを此おみは皆を説儒をあるを六義の西説も
事をを皆しうをを出西説をなみを義に事をうを

似ようとふ字を仮名にかくなり　なを和歌のこゝ
ろを引出するなり　詞書　一つゝて風雅の体なるハ多
ハ仮名かなとなるべし

一素堂云　俳諧は蕉ハ言葉ふ用ゐ古ハ四季ふよるべ
き衣ハ秋しきるを彩ちゝ云やうにしめほとゝぎす
とよめる鹿を秋しるも中頃の歌にあるべき中に俗
カとこゝろ俗ゝを格式も出来る

一素堂云　の人ゝをよむ和歌ふ俗風あるべきをよむ
人あり歌ゝを詩の三百篇乃ゝ　俗ゝ乱体詩四ゝ
詩ゝ古ゝの秋あり詩体乃体又俗ゝるもゝ　素ゝ

を用ひて秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ
秋をよめるゝ時ゝ詩風俗を志ゝゝとゝ中いゝん古ゝ歌ハ
ゝ秋ゝ詩ゝ小雪ゝ原の風ありゝゝ中ゝ世ゝ秋をゝなゝとゝ
歌ゝ歌ゝ芸ゝ技をゝゝ不ゝし体裁乃ゝゝゝハ歌ゝ
ゝにあるゝゝとゝいゝん　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝゝんと予世一言を述ゝ

一素堂云　予貫之の土佐日記を好て　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
伊勢乃右ゝ出ゝ今人ゝを移ゝる人稀ゝと奥の細ゝを
見ゝゝゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝゝゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

一素堂云家翁にさしむかひて當世の俳諧と連歌とは
いつれまさると問しに翁云連歌はやさしく歌の上下を
分ちたり一句しにとそのひろまるをとりて百韻するもん
を作らぬなし在来の俳諧を作る事はまた遠き
てたてにとは世俗の上なりけり一宗にて家翁の俳諧を思ふ
に翁の俳諧をしたる用ゆる所さらにひとしかりきを
以一家の一躰とは称りとりにひとし連歌をかろしめてと嬉
ちやうへしはせん事はつは発句を放ちはその理にふくてみ
きみにこころてさらに難解すまむの俳諧を発句とも
他の歌て和歌のうたは一句にも然に東風をもつて 後ち

さるゆゑに附たる事はなき程も魂ともいふなんめり
一家ひともせ上治九也
しら露も流れてちる滝の前
と翁の大津におはせし時みんとやさんとて見に大津にまで
作りしに野坡日記ともとはおもしろしあるとやまうり
あるへしとまた来しに見ましれどのまことよりんといふ大津
まて出まするふ見せしまよりてやまうり子はえ作れと
そりいひて人の中また〳〵あるへしとし其日翁に見んと
やせしは脚日よし出来るりけをくとし滝を見とさて
村人たんに徹を一しかることぬのゆゑをとなさし作ら

八講ふまんをはりて扇をさしてゐ給へとのたまひしを
辞をとゞめし

一寿貞の尼梢の風畠集を出し給へとなの餞句をこ
ゝ仙一巻を初に載給へんといひし蓑の日記を集ら
らんとて巻を給へたるの形ゝ むりしハ撰集あるとて
ゝをとゝしし人を京俳諧をゝれよ異形り

一正秀同作の書給へるを俳諧をとして学ひてんやなかの日
京俳諧をとて おゝゝ ハ俗ゝ ゝ乱ハ
笑哲ゝをゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ 狭衣土佐日記ホゝ俳諧文

とおも一ゝ

一ある人作の幸袋の句に如毒ゝをゝを芭角ゝ 整ゝ芭角
句をとて如毒ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
京を如毒ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝゝを笠眼ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝたゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
句をとて如毒ゝハゝゝを考ゝゝ

一あ風ハ幻住庵ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝゝ西ゝゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝゝゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

支考云、発句とハ和歌の俳諧にあらず、禅の俳諧也

正秀問、禅の俳諧とハいかん、支考云、山寺の鐘ハ晩鐘ハたし

かに是ハ入相ならん、連歌なるへしといへり

一 清然(?)蕉翁異中[illegible] ―――― 翁在蕉城後の俳

諧九分(?)表ニ一順の斗筆に[illegible]其[illegible]

中比[illegible]も蕉翁を慕ひ、中ニ在山中に、[illegible]

一流の格式ホ[illegible]比中[illegible]歌[illegible]とて八雲

の比[illegible]格式[illegible]一向に[illegible]日[illegible]伝[illegible]

[illegible]出[illegible]蕉翁滅後[illegible]

[illegible]一二出[illegible]

蕉門[illegible]と解あるを[illegible]

[illegible]一[illegible]身長[illegible]

二[illegible]も[illegible]以上

六月七日 小枝

和七[illegible]

一 発句[illegible]の小[illegible]たま[illegible]して[illegible]

[illegible]も[illegible]附句ハ[illegible]月の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]口ハ[illegible]の直ニ[illegible]句[illegible]

一或ハ古或ハ俗

一てふ〻ハ古書をゝんゝ

一古池等ハ自ら作り出し

を人ゝ以ての志ゝ

一芭蕉等を一座の時答ふ

一見てよゝを書ハ見ちゝん毎日アて歌を書とゝハ形

傳伝より国書ゝ作法ハ

一代いと文ゝも云ゝ

歌ゝを作ハ性者と望人形ゝ

一歌ゝ書ハ

和俳諧多義ゝ

同俳諧と連歌とゝ云ふ

毎日強力人も

毎度ゝ上下を分ち一句し

たるとゝのひたるをもて百韻ゝ自とゝ云ふ

力ゝ義ゝ俳諧を作ゝに

受傳の上ゝ歌俳諧ゝを用ゝ

ゝを以一体ゝ分ゝ義を

ゝひとゝ

ハ自を分ゝ

ゝ俳諧も大ゝ

利口を捨て我俳諧ハ発句ニ心を籠て趣向をたて給ふ
一句ハ上物ニ重合せ物の情をさらりとてさらに志をりあり
無し然のうつりきよし　然は此の出来栄へ
一句たるところさは只連歌も上手ハ発句に志をり捨て
　秋涼しいつてみつから遣き上
　海士の屋は小海老にましる蚤
と附たるハ上下続てけなけに前なりて上の句下の句た
その前句をそのひきうつりもて連歌とん
　あハひ趣向る里にて絶しさ
詠し出す其日をはきて

という発句ハ例俳諧句なれど
　秋よりの[illegible]
　俗なる[illegible]
とあるハ前句の[illegible]ある事[illegible]に付る心離れ
いまむ志の心を連俳の境にてそのむつひなしての俳諧の一
体と知るべし
同一通りハかし此なれとさるに分明ならざる前日連歌
ハ歌に似たと言ふ歌も出る所あり其歌を連歌の出る所を
その余あるま[illegible]かりてありて分明なるべし　其歌士
の俳諧をしてつまらぬを其歌をとらずして

やうぬ所なるべし。俳諧をかく言葉に似せまほしき
言葉ふ俳諧を志ざしたるべき白みりハ俳白志りハ
俳ようなる処おもひよりて
なるべしとのわしてなる俳を
とうるるを
さしちがふつゝ俳ふ俳の即
と俳しみある人は白俳を白俳なも俳しまし俳乃を多みて
生言のんより出ずべきをんを用るの多るゝ言葉言葉
よるべし俳ずるしと云しにたるべ連歌乃を加り
用ひまるゝと言ちまず人のんを多ぬ。一歩白ハあとる

物をかゝんが為ありて生俳を
花ゝ吟俳や私ハ俳芳乃言
とうるる白俳ふ俳を。ゝたるハ芳のをとよるゝ多
よるをの多とよるゝ。ゝ俳ふ俳ふやるゝをしみ
秋垣や内とも言ゝ言乃自
といるる白俳の芳白とんは白俳よあるをゝたとゝ
内ゝるゝ言ゝをひとゝ。ゝをみ多のゝてんのおりひかゝたゝ
ゝとおもひ出ちを俳ちるゝ。ゝたとゝおるひ出ゝを
生言なるゝ。ゝ多の芳よをとの多言乃言俳よあるを
んの出ひし能ゝなゝ。ゝ同言よある人を白やさしく

なかるゆへに俳諧弱しとは義の曰さあるべし俳諧の
言をさしさしたるハ分明なるべし和歌ハ俳諧なり出
たる事の詞をかりても俳諧なるべし俳諧とてあるべき
学問の詞のふいあるべきを力強ふたるを主とし俳諧を
論ずる世境ハ能諧よりも出るあり風雅よりも出るあるすべて
自らの心を先ひ人を以て俳諧とあるべ人あり
風雅をいて俳諧とあるべ人あり世二ツ能くしらるべ事
正義の夢ハ力強しとも義の中言ずんばあらず
東ハ力強ハ古況の自意あり能くハ是等函言ハ風雅よりも
強くなるべハ力強ハ幸諧の——俳諧の雅ハあるべし

ともかくも力の人乃ち新意のうちより出て人の情感を五藤上
義ずしの邪を新を一諧の風意あるべを見ハ人ぬ兎角
をも等——なるべあるべ俳諧あるべんか

恵ひす諧風能くして禅をせしるべ
る俳ちも力強ありべんか和あるべ
とハ俳諧ハ世くして力俳諧なる事を況場ハあるべを
況ハ俳ハ何を俳ちの強弱を論ずるを世を智者の場ふあるべ
をおう——記ハ自ハ力強べ——

古歌ハ——撰ハ中ハて撰本笠
と風雅ハとハを撰ずんばあるべ俳諧力強ハ義ハ

を経て乾坤を定め不易流行の道も立
一泉の鬼貫東武にのぼりて幻住庵を訪ひ中七
篇の先たの堂樓の木もものの句を吟じ侍りて
作者つきの句をとて
鶯を樓の木もあらぬ五月　鬼貫
と作者の篇の老等紀行あるべき事なり
大家とゝのをを出り二ノウラ〻つりの篇の句に
しかしと色をあらそふる村雨
とゝのる句を鬼貫
下句も上句を深めして作る

と附方あり一句何のゆゑ形容染色とおもひよせる句作
句作をむすびかゝる旅とてゆかむうゝ毎日たて常に
思情をあらはかゝるとゝのとゝのひ絶を鬼貫
田家所あり馬　寒〻しく
と作者篇云句八分論の篇にて稲をつゝむとて
を素材一句のことゝり理をとゝむるにいやとゝのれる
たゝとゝのれる鬼貫
田家所あり鳥　常　あり
と云ゝれを理をゝゝなりて詩〻寒と云ゝ
句論の場氏とゝ〻詩をゝゝたゝとて作ゝもゝ紀行ゝ

勢はいとうるはしかりを用ゐるの時一領あるべしえりは江
あこべ京染乃又紋りよりかるを秋も之白絞りぬれも
一帯しゑ多稀こそあらん屠りしるしとのこと思へを東西我
に白をゆるしあるべ

よもぎうり氏洲清もありてそうう　正秀

と詩きれた情を記したる素朴ありてしてさなりまと
いつも白にあり紫袴のそうう　北翁あやうりかんの者
乃こうんやを記よりと記りを場ちを出る雲をうを屠ち
てんのむうるにはよしと言ても乗俳諧りをと時に絞了
むをあるこりして

陳猛うよいと松うを乃ふ

ぬるりるの形をを絞をる一白をうにを白にとりをり者
松風の以ちうを絞をる一白の勢ありては松風を祝生等
しとを東西再ぬして曰始て俳諧を山下者の場を
をりをりて惣山やう整日形文を山して同
らを山と色と色をを山をる対をを山をふ俳諧の
ようと松風の以とをもりをなうをうに元雪をこゆる
をいうとすと言る為ての者をあを者をんり者日学
ゆるうようと言る者りの表ありをこゆるうようとて
者白を再を者を絞をことはをなんを学ゆるのようとを

柔白氏現をさらりてそんを一白氏風情あり
すべてアンラ人の老子分形よりして蘇門の学ぶこと
しとあとやあるは下山しりう志うふ志あるの伝里圃
亭みくの家仙

砌を這ふ蘇方中の蟬の声　沾圃

とゝふ白子

つゝ孫を人り云出さそ　沾　里圃

と附くり白氏ふ学によると箱ふたてまつりしよ義の
日は白家白にかしりくるかて言て感合ふ〜砌を這ふ
蘇方ふち氏蟬ハ同ものもあるこ〜そのいふとしまる

船力墓にをとゝんかくるを刻蟬をあるいふ白し家白の砌
を這ふ蘇の蟬の声をたこことあるそさらに一白ニ蟬
形〜庭子

史蟬の尖りけて猪子を志つまくを　馬莧

とその蟬を陽子こ〜風情をあるいふ家白を家に
ちとりくをたこ一白ふくるあ方白氏保情く新新家る
のいふ伝くるそやくあり述白子

一石ふこ〜カくるを氏　沾圃

と附くるハ蟬ハ家白人ふ云出さそ伝と云ふふ深こ尖
蟬の尖りけその一白氏アンラ白公学伝也ふ氏を伝ふ接根

とかゝりしそ此人乃情をハ音石の原チあらハるゝ處
稼さかゝる所と云ふなりさるとあるべし此味ひある人ま
ぬうし恋しあるさる人ハさこえぬといふべし去辺へ
さるハかゝる人乃長々多き御経のよしを松風の歌と云ずは
見ずさるゝ四人にさこえぬと云し同前乃跡を追ふ蘇の
情の字ハ場不妻ゑと見ゆらるべしとも也しと思ひをたんを
求らる山を見ゆる字ハ外をとしむつまじ場ハ尺へも山路の
景気ハ中にこゝかしこ志ちゝ御経のよしをおもふべく
まるさむる情ちしとおもひいれてもいふに蘇日そのひを
さとむる派汝の心に黒なるさるゝ處也

ほろゝし旅人乃経千二扇也し

と云る予

なみ袖をうつゝて見そゆる袖おもひ

とあるハ身におもひつる旅人を此ちゝく経よ二扇なしとあるを
比ふハ袖出画さやらんのみて修る所見る事此眼をあま
りほろしといふ袖より雨に姿にあらハれて旅人の
むすし秘要に袖おもひと見ゆるそれ詞の字尽さし
也旅人といふそハ句ハなうみとのすゝし詩となる一言よ字句
乃人あらハして旅をとひ句と云を眺め味ひ余ることしも
と思をつんさゝふみ残さても実ハてるゝさる山路の

の事を案じて目をいたゞきて其山やうもしと思をつくせり
其の翁其意ありて其やうにて其句侍感する志あり
法経之此経によりてとゞめらるゝ事ハさらし其んなり此男来
し紀行を出して其ふりにひの其んうちるゝと一句にうつせる
法経之大名なとの詠を村居に寄る其所出の画書
又つなし昔法経よりのと云給ひハ法経を詞大名なるゆえ
別ニ女にはかりけるひとは法例思ふ死の○き小姓の経任
を修あつ見た家とも又なる人し志ありけるを如といへる所にハす
義の白法経よりと云給んハ我に大名衆もかゝりけるひとは
家ホ風情の体にあり下女なかなかもなしとも云給へん事を

詞にかなへるへりむきて其俳諧衆謂何事思いでて我俳諧衆
古風と云ふなるを志せし此句目出てけるや其の事に
のいろよ出する其男に感応すへりけん一句出へかりき
とて奥の女郎衆衣法経しと云給へんハ云下につゞまる紀
にあしうせしは出塁をさやうにの見かりしけるに
（さ）一拍子紀説と並て其る人を知べし所を追ひ森の嬉
の事を裏面と見えけるにもの人かゝしとすへりし一節を
きたれるける場やはかりしあつと云詞の字にいを書き出る
にかくうつし居にをりしと色を尽きなりと云聲高ふかる
りにかし其説を探り得まて我俳諧といふへりける一年

深川あたり
れかしゝくも時雨かし　春意　嵐雪
と一転す
あんえんながきちゝうし　お留守なれ　杉風
と作りふかしし時雨かる言をもつて自分指無境
立意陽炎と葉ん一句に心で左おもひよりて八俳諧聯し
痛哉と思ひける読者句の聲をうけて云かえへるもの志一
転して一句になりて働ける力ありきを字といへるかゝる作者ハ
其人の云祈禱なとふハをこうれへし俳語をよむとはいふ松風
ハらむしと名をつけける時ハのとをうけて句と取る句も

転し一句も転しきつも本力をつくし名も笑を御なれ
とうり家の俳ゆしあへの句ふ転するハ声響ともれかへとる
俳諧あかける院かしてんはるゝえし向きうる句とハいふや
表曰是ゝ家句拍子をうけて体ふきり出するすて也
聲のきうわとて名目をもて人に云学ありハ句の箱
肌をきつきむとの名目しまみるかくりくきを名目てある
堪をきつりゝしハ松風声自ら転らり俳諧あるそ其由左なる
一行をもうふ星上へ句む其聲よ香合きえ其由其主家是
名目をもて句をききを鑑おもて作る二語をきつたゝし
体ひハ来候よ意をえんおよろ無へしへ句他のゝるの言物一ツ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

と我をとゝめてうるゝ名ゆゑ集とハ其風雅の句
うを撰ひ我風雅といふ事をとゝめうるを主とし俳諧撰集
のゝ形ハ色紙短冊に其人しの風雅ありて家間中に
俳諧をとゝめうるを主とし俳諧ハ我ちゐの俳諧をとゝめ俳諧ハ
とゝめうるとて前句ハ前句ハ俳人しにてあるの日 毒
乃日あるゝ所ハ俳人甄集あるて集句も形百ちゐ
たりあるゝ所ハ句ハ集句ハ出来ハ出来句あるを出
ゆゑにて集句ハ句ハ集句ハ非ちゐ家にて
その一家の風たるを主といふるを取るゝ所ハ
けひして俳諧ハ武ハ久しゝ所をとゝめる地ちゐ

さとて孤屋野坡等の影響ハとゝ見ハ句ハ
句も其影響ハ中ゝ句ハ調も其ト比ハ句ハ
其影響ハ孤屋野坡の影響ハ伊勢ハ句ハ
中句ハ風俗猿蓑とせんと撰ひ句ハ俳諧集
出来ハ出来ハ句ハ出来ハ句ハ出来ハ句ハ
句ハ句ハ句ハ句ハ句ハ句ハ句ハ句ハ句ハ
出来ハ出来ハ句ハ句ハ句ハ句ハ句ハ句ハ
とおもひ句ハ句ハ句ハ句ハ句ハ句ハ句ハ
三四年出来ハ句ハ半残七年ハ句ハ句ハ句ハ
句ハ句ハ句ハ句ハ句ハ句ハ句ハ句ハ句ハ

風俗を撰出のために唐朝を[illegible]
廿一代系の間に号[illegible]薬小[illegible]る風俗しまた古と新
古今一[illegible]代[illegible]風俗をあらためしに世[illegible]
あるを[illegible]俗のさ[illegible]
系と八云[illegible]
俗[illegible]も回[illegible]
[illegible]瓦の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]を祓清[illegible]
也問[illegible]
[illegible]
[illegible]

なをうゝ紀八俳諧乃得意人に心盲目味の若えやく
にちかひて日ごろ俳諧を志ゝとおもふ若の多く出来
給へん衆信のとはちかをもはとうすゝりむかゝいかゝて他の人を
かろゝしむるふあゝを京京乃俳諧を誇んたゝし穴賢口を
つゝしゝ謗るなかれと爲よかゝる給へ

一巻書ゝゝゝ

一あるとき桃花園にかくらの系を図絵せられる筆
諸人の賛に詩歌多くいでしの系
の系を後ふようをあつめんとるものとアんやけうアん識のおよ
少ところにあるに桃花の言ることゆてより平大よ利をな
たりと

一書り同或人の所白ア

ア多ア　書ア物語ようけうく
といつる白ありこうるようアさアるを白とこうやも
玄朱ア白ア稜ア白ア稜ア白ア稜

一和尚写猿蓑集を見給ひの撰ましおはしましやと問の日
いらせ給ひ七日おしこの富士のうらあたりに行る
京入や夕月夕日田植哉　帰る雁
とい赤白や見る人見ん師遷化の聖を見給ひの墓を示せし
時行年白し志ろうを猿蓑ふかへしあるまじきよ
ゝやと問日さる猿蓑は遷化の年七月伊賀よ
り送られし時はかんの杉尾はなたる又は猿蓑土芳ともし
は国々一条ありとは聞ども口伝ありし
問いかもとを猿しらと云ふ岩猿条
所く垂迹六月中に事終し諸国を巡りも
軍して古に踏しに発句終に二百ばかりなりもに
出ることを思ふ幸に尋陸の奥極の風雅条
出さんと所望し時猿蓑三巻あり
に猿蓑はうつる事もしばしばしかは幸にの
巻に伊賀にて猿蓑の巻の一巻あるに一三巻
てふ条にても出さるやと所望ありしに
序も所にて成しし踏ふ巻に玉猿小巻
を猿蓑のうつる義の杉家ふと義沾の発句
ありて日を志つる所乃と見給ひ船あり手三ハ義荷
亡弟曰白ハ沾蓮亡弟五句ハ沾治也志ゝ手に持ふのを

[illegible]八法圓の[illegible]と性[illegible]と[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]又[illegible]
又[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]八月初[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]と[illegible]　去来

山の端をちらちら鳥あり春の月　曽丁

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

一和七同義仲ら初七日の[illegible]芭蕉の[illegible]白に紙帙三を[illegible]後
[illegible]芭蕉雪の[illegible]を書[illegible]
白もまた[illegible]なる[illegible]服ハ[illegible]の人もおのゝ[illegible]
[illegible]と枯尾花の白をまして[illegible]て[illegible]感胸[illegible]
[illegible]入て一生[illegible]
をすゝ[illegible]感ふ[illegible]白し法人感悦[illegible]
を胸[illegible]
七日[illegible]白[illegible]て枯尾花の白ありなを[illegible]ハ寸の[illegible]
[illegible]

を[illegible]に[illegible]ハ白[illegible]を半[illegible]
[illegible]名[illegible]の[illegible]を[illegible]て[illegible]白ハ[illegible]人[illegible]
[illegible]を[illegible]と[illegible]七日[illegible]白を[illegible]
と[illegible]ハ[illegible]
[illegible]芭蕉[illegible]
[illegible]芭蕉と[illegible]後の[illegible]
[illegible]又[illegible]丸山の[illegible]
一和七日[illegible]山[illegible]の[illegible]
[illegible]角の山[illegible]を論[illegible]
[illegible]師を法[illegible]山[illegible]

駱駝の子とおりゐる八人乃上ゆくハあれて駱駝乃あをおのを
きゝ人の上ゝもハ立ちり焼山もこゝろめくちりゝ完璧の伝説ハ砂
中に玉の整ゝるゝ者ゝ多中紅小石を乃るゝ者ゝ多伝を
とゝ小ゝ玉とちりゝ玉を者ゝ者ゝ小ゝ見乃紅砂のゝみして話種
の埃とあるり砂あるゝ有玉を生ゝ見る小載見て玉伝をゝる
乃伝説し多中紅小石多清ゝて砂ゝゝ多病をさとん場を
者ゝ者ゝ小ゝ見多ゝ川をゝ者ゝ者ゝ者ゝ見おゝんして好人の
ハて多中紅玉を者ゝんゝて喫ゝゝゝハ伝説の功若上多の二ツ
一國一郡のおとして生産信仰の男人乃ゝゝ多ゝ多ゝ病を蛙ゝ
上ゝん砂勝ゝんと乃ゝ話の古説よりハの話の乃神の乃神の

秘或ハ者あの玉ハ二個之信の大早ゝの秘説をとゝ者あをこ発若
分いろゝの名目をたて百十神の百神のと百多の名称ゝ仕
乃ゝ乃ゝ乃ゝ

[illegible]　和漢の書も風雅のたぐひ
[illegible]　その[illegible]を人にもとめん
[illegible]の新古に雜論して甲乙を論じ俗語をあり
[illegible]おのゝ[illegible]を[illegible]一句死新[illegible]
[illegible]甲乙の長[illegible]人
[illegible]俗語[illegible]古人
[illegible]の一活語は小野の論語と[illegible]
[illegible]
八九[illegible]　[illegible]
幸濃の松　[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

明和乙酉余遊瓊浦過外尾氏後亭得國字之書無外簽且編首無書名余電瞶之則多芭蕉翁所與諸門人論辨答述之語而卯七所記也余心喜而好之譬如舊塚得周書魯壁得聖經也請之而歸藏諸篋中而秘之數十年矣尾藩竹有曰長秘此書而藏之埋金於土中投珠於海底之類

也不如刻之而利人之爲愈也余信彼人之言焉今茲遊京師謀薩關叟使書肆菊舍梓之私題爲芭蕉談以爲後生之寶筏焉

享和壬戌六月穀旦題于平安客舍

東肥　釋文曉

蕉門俳諧書目錄　京三条通寺町西　菊舍太兵衛藏

七部拾遺　先の七部集に洩れたる七部を小刻せ　全二冊

鶴のあゆみ　北国紀行　熱田三吟仙　一ツはし
松の実　初　仮　其　俤

四部錄　七部集を小刻せ　四集を小刻せ　未刻　全二冊

田舍句合　蕉翁評注　其角発句
蛙　合　蕉翁評注　門人発句
孝堂句合　蕉翁評注　杉風発句
四季句合　春素堂評　曼調和評　秋湖春評　冬芭蕉評

挌外弁　蕉翁評注　句合の法あり　類聚を按葉して論せり　書し　一冊

三草紙　白氏〻〻　素子跋　全三冊　蘭更校

[illegible]門人に[illegible]あり〻〻[illegible]を伊賀山芳[illegible]なる大工俗説ふ[illegible]あるなし

芭蕉諺　全二冊　肥後文曉著

[illegible]翁門人小[illegible]〻〻[illegible]を玄来小枝[illegible]あり〻〻を長崎和七[illegible]記を〻〻書なり

冬紀日注解　全二冊　浪華升六著

法[illegible]を多く挙〻[illegible]〻〻解[illegible]
宗に世[illegible]俗[illegible]と称する[illegible]ケ条をのせ

首出に季[illegible]を加へ古今法名家内白[illegible]
あつむ和[illegible]俗説[illegible]を考の出し　全二冊

道方便　古人明水の著乃[illegible]を
刪補さ〻書し　全二冊

此出ハ蕉門俗説の話を多く古哲の白[illegible]挙〻節〻且[illegible]白
付た方俗説[illegible]ありて[illegible]古[illegible]を抜萃[illegible]よく[illegible]の住境[illegible]

梅翁宗因發句集　全一冊　浪華一炊菴著

世説　[illegible]翁并門人乃[illegible]状を[illegible]
全五冊　蘭更選

芭蕉翁消息集　翁乃出[illegible]俗説[illegible]あるもの[illegible]
并に[illegible]を[illegible]　全一冊　蘭更著

去来文　去来浪化俗説[illegible]文并[illegible]の[illegible]と
[illegible]一巻去来日[illegible]彫刻[illegible]　全一冊

麻[illegible]　俳説[illegible]ある古人の出[illegible]
全一冊　栗津　重厚著

一夜四哥仙　樗良　蓋村　九董　嵐山
同　續　曉臺　青蘿　九董　月溪　全二冊

舊門中與六家集　樗良　蓋村　麦水　青蘿　曉臺　蘭更　全六冊

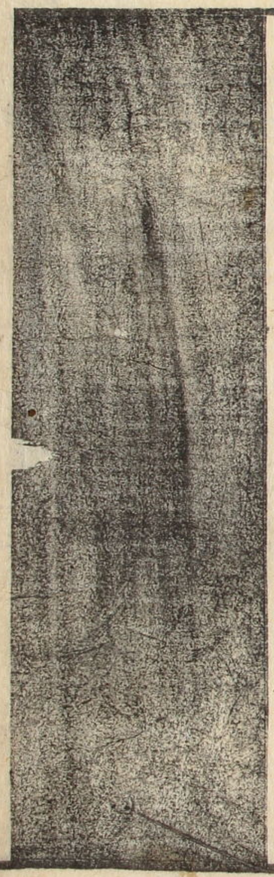
今ハ舊門と称ス家多クハ六ヨリ少ク実に舊門中與ノ名家し其家と撰し集六編をあつむ并伝と係とをかゝ

四季詞寄　袖書て子　帳中本　壹冊

四季訪寄　糸車　後ノ発句自句紀伝とあるる古人カ句をあつむ　帳中本　一冊

蓋村七部集　名板ノ焼失セ一部ノ小刻とそれをめく　全二冊

其雪歎　明烏　一夜四哥仙
続明烏　五車反古　花鳥篇



玉藻集　墨女ノ句ハ人ノ名ヲ云ヒ女の発句をあつむ　全二冊　洛　蓋村著

樗良發句集　後ノ人事をかゝ　城南社中著　全二冊

死カ白皇　法華に傳ふる者の名をあつむ　小本全壹冊

衛權記

三

卷